

袋井市総合教育会議 会議録（要旨）

会 議 名	令和5年度第2回総合教育会議
招 集 日 時	令和5年10月18日(火)午後1時15分
会 議 時 間	午後1時15分から午後2時50分まで（1時間35分）
場 所	教育会館3階 ICT研修室
出 席 者	大場規之 市長 鈴木一吉 教育長 鈴木万里子 委員 溝口知秀 委員 吉田陽子 委員 (計：5人)
欠 席 者	大谷純應 委員
傍 聴 者	無し
当局出席者	石黒克明 教育部長 山本裕祥 教育監 小鷹義晴 おいしい給食課長 久保田典孝 袋井学校給食センター所長 塩原茉那美 おいしい給食課主査 神田明治 学校教育課長 中村悟史 魅力ある部活動推進室長 鈴木立朗 総合健康センター長 藤田佳三 産業部長 矢内英直 財政課長 小澤由靖 健康未来課長 鈴木浩方 健康長寿課長 鈴木賢和 農政課長 山本 浩 教育企画課長 松井健尋 教育企画課主幹兼教育総務係長 (計：15人) (合計：20人)
会議に付した 事 件	別紙「令和5年度 第2回袋井市総合教育会議日程」のとおり

令和5年度 第2回袋井市総合教育会議 次第

日時：令和5年10月18日（水）

午後1時15分～

場所：教育会館ICT研修室

1 開 会

2 市長あいさつ

3 議 事

日本一の学校給食を目指して ～日本一健康文化都市を支える日本一の学校給食～

4 閉 会

1 開会

●教育部長

それでは、皆さん改めまして、こんにちは。今日のご出席ありがとうございます。只今より、令和5年度第2回目となります袋井市総合教育会議の開催をさせていただきます。今回の総合教育会議の方では、学校給食にテーマを絞りまして、現状や課題を踏まえまして、皆様でのご協議をお願いしたいとさせていただきます。よろしくお願いいたします。

2 会議録署名委員の指名

●教育部長

溝口委員 と 吉田委員 を指名

3 市長あいさつ

●大場市長

改めまして、こんにちは。本日は、お忙しい中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。先程教育部長から話がありましたように、本年度2回目の総合教育会議ということでございます。どうぞよろしくお願いいたします。皆様もご存知のとおり、「総合教育会議」は、法律に基づく、市長と教育委員の皆さんとが本市の教育施策について協議・調整する会議でございます。本日の会議では、「日本一の学校給食を目指して～日本一健康文化都市を支える日本一の学校給食～」をテーマに、皆様と意見交換しながら、袋井市における学校給食について、活発な議論を重ねて、今後の施策の方向性を共有してまいりたいと存じます。さて、本市の学校給食は、袋井市総合計画の中でも、「心と体の健康」を目指しまして、取組の一つである「未来に輝く若者の育成」に向けて、「地産地消の推進と安全・安心な給食の提供により学校給食の充実を図る」としております。成長期にある幼児、児童及び生徒の心身の健全な発育のため、栄養豊富でバランスのとれた安全な給食を提供するとともに、幼稚園・小学校・中学校及び家庭との連携のもとに、食べる喜びや楽しさを通して、健やかでたくましい心ゆたかな人間性を醸成するためには、大変重要な取組みの1つであると認識しております。市内には、3つの給食センターがございまして、とりわけ、平成25年9月開設の中部学校給食センターでは、建設当時、最高レベルの衛生基準に適合した最新の調理機器を導入いたしまして、そしてまた、その設備を活用した、より効率的な工程で、子どもたちにとって安心安全でおいしい給食を提供し続けてきた結果、建設から10年を経過した現在でも、全国から視察者が訪れるなど、全国の多くの給食関係者に注目される施設となっております。一方で、他の2つの給食センターは、それぞれ、平成2年、平成4年に建設された施設で、老朽化も進んでいるため、市では、本年8月に、9項目から成る「『日本一みらいにつながる給食』アクションプラン」を策定し、現在の取組みをさらに進化させ、市全体で、日本一の学校給食の提供、さらには市民にもその効果を及ぼす取組みに向けて、あらためて始動したところでございます。本日は、その学校給食に関し、本市の現状をご確認していただきますとともに、抱えている課題も幾つかございますので、その解消のために、本市が向かうべき方

向、本市に必要となる施策など、皆様と協議してまいりたいと思いますので、是非、忌憚のないご意見をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

4 議事

日本一の学校給食を目指して ～日本一健康文化都市を支える日本一の学校給食～

●石黒教育部長

それでは、本日の会議に入ってまいります。本日のお手元に配布をさせていただきました議事内容で進めさせていただきます。なお、本日は、教育委員会が担当している学校給食に関連するそれぞれ教育委員会の職員、それから、地産地消の関係で産業部の農政課の職員、また、食育や健康づくりに関係をするということで、総合健康センターの職員、それから財政課より財政課長も同席をさせております。皆様方の議論につきまして、今後の政策の参考にさせていただくということで同席させていただいておりますので、よろしくお願いいたします。それでは、ここからの進行につきましては、議長である袋井市長、よろしくお願いいたします。

●大場市長

それでは、議事に入らせていただきます。協議はすべての説明が終わったのちにまとめて行いたいと思います。はじめ、日本一の学校給食を目指して、「日本一の学校給食を目指して ～日本一健康文化都市を支える日本一の学校給食～」というテーマにて、事務局より説明をお願いします。

●袋井学校給食センター長

資料に基づき説明

●大場市長

はい、ありがとうございました。それでは、ただいまの説明の中で不明な点やご質問とございましたら、お願いをしたいと思います。

●溝口委員

説明ありがとうございます。事前の説明、それから今日の説明資料を見させていただきまして、やっぱり日本一目指すっていう、題名にもありますし、それなりの結果も残しているというのをよくわかりました。課題も最後のページで4つですか、施設の老朽化と衛生管理基準、地場産品の問題、市民への普及の問題、教職員の問題、これもよく理解できました。大谷もいろいろ質問してくれませんが、これを聞きますと、皆さんがものすごく頑張っているのが、よくわかりました。実は、これはあくまでも供給者側の目線の考え方であります。まず、これを考える前に、袋井市、あるいは袋井市の教育関係の皆さんが子供たち、それから子供の親御さんですね。この人たちに給食を通して、何ができるのかなって、もう一回一から、一からというか、そっちから入った方がわかりやすいんじゃないかなというふうに思っています。例えば、給食費も全額回収できてないという問題も

あります。それは、やっぱり何か親として問題がある。そういう問題もふくめまして、子供達、親に対して、どういうことをしたらいいのか、どういうことができるのかっていうのを、その辺の話から入った方がいいんじゃないかなというふうに思いました。

●大場市長

はい、ありがとうございます。それはアプローチとして、まずは子供たち、親御さんの意見として、この給食に何を求めて、何が足りて、何が足りないのかっていうようなことをまずは知るべきじゃないかと。それに対して、結果が出てくるかっていう、そういうことでしょうか。

●溝口委員

一つは、設備の老朽化も、いろいろ再編も考えていただいてまして、二十数億のお金がかかるっていう話も聞いております。そういうのは、もうどういうふうに進めるかだけの話であって、逆に言えば。方向が決まったら、そっちに向かうだけでありまして。まずそれが本当に子どもたちのためになるのかっていうところの検証が、まず必要じゃないかなというふうに思っています。

●大場市長

わかりました。では、教育委員会としてというか、事務局の方で、子供そして親御さんとして、給食に対するどういった希望があって、何が実現されていて、何が実現されていないのか、また、給食に何を望んでいるのかというようなことに関して、調べた結果とか情報はありますか。

●おいしい給食課長

はい、よろしく申し上げます。よく学校給食は家庭の食事の見本ということが言われています。私も給食を食べたのは、旧浅羽町の時代に、3年間給食センターの事務をやっていた際に食べてから、久しぶりに、おいしい給食課長として勤務し食べています。やはり家の食事と比べると非常に薄味ですし、味噌汁の具を見ても、非常に野菜がたくさん入っているっていう意味では、子供たちは毎日食べる食の中で、家の食事、家の味噌汁よりも味が薄いとか、家の味噌汁にこんな具は入っていないのに、いろんな野菜が入ってるんだと言うような気づきがあると思います。先ほど説明した資料にも、17ページ。袋井市の給食の課題というところで、子どもの食事調査の結果、これは3年前の結果になります。また、来年行いますが、5年に1回の調査ということで、新たに小学校5年生対象とした食事調査を行うつもりでありますが、結果として、家庭の食事では塩分の取りすぎ、おやつとしてお菓子の摂取や、甘い飲み物を取り過ぎている半面、体を作り上げるために必要なビタミンミネラルが不足しているという実態があるわけですね。そうすると、冒頭話をさせてもらったように、学校給食が家庭の食事の見本ということは、やはりいかにお母さんたちに学校給食を知っていただくかと言うことが非常に重要だと思っています。一人一台タブレットになりまして、タブレットを展開していけると、非常に学校給食の情報も入っています。しかし、その情報を子供たちは家庭に持っていきますが、試食会等でお母さ

ん方にの話をしても、実際見たことがないと言う家庭も非常に多いわけです。ということは、やはり私たちの学校給食の考え思いを、提供する上で、献立を作成する上で、心がけていることを、まず家庭にも伝えて、それを家庭で活かしていただく。減塩にするだとか、少しでも野菜を多く食べるような家庭での食事作りに心がけてもらう。そういう取り組みが必要なのかなと。それが今日の会議の題名のサブタイトルにもなっていますが、日本一健康文化都市を支える日本一の学校給食と言うようなところにつながっていくのかと考えます。学校給食は15歳、中学校を卒業すると終わりますが、そこで培った、食育で培った知識を、それ以降高校・大学へ行きますと、一人暮らしをするのかなと思いますので、そういうところで子供たちには意識をせずに、ふさわしい食生活をしていただきたい。また、家庭ではお子さん、家族含めて、学校給食を理想とした家庭での食事を展開していただきたい。それが日本一健康文化都市を支える日本一の学校給食の最終的に目指すところなのかなという思いもあります。色々ちょっと方向行ってしまいましたが以上です。

●大場市長

はい、ありがとうございます。今の話を説明を伺っても、溝口委員の先ほどの提供者側からの話であり、提供者側からの理論というところから脱皮してないのかなという感じがしました。おそらく、皆さん同じだと思うんですけど。溝口委員、そういう要はスタンスを変えてとおっしゃられたりとか、その背景をちょっと教えていただいて、宜しいでしょうか。

●溝口委員

さっきもちょっと言ったようにですね。例えば、給食費も払うという予定で払えない人もいる、あるいは、家庭によっては食費を工面するのがすごく大変なご家庭もある。たぶん、そういうのが散在してると思うんですね。一方で給食センターは、子供たちの数が減ってどうしようかって、いろんな見直しをしてくれている。そういう時にあたっては、もっともっといろいろ子供達、親にもっと寄り添えるような活動がもっと入ってきてもいいんじゃないかなと、もしあればなと言うところが、ちょっと気になったところです。

●大場市長

寄り添うっていうのは、例えばどういう寄り添い方がイメージでしょうか。

●鈴木委員

寄り添うっていうか、今日の課題として出された施設の老朽とか、やっぱり平等にしないといけないということだったら、3センターで同じものを同じように提供するってことも当然で、施設改修についてはぜひとも予算つけて、市でやって頂きたいんだけどね。じゃあ本当に市民っていうか、家庭にまでこの日本一の学校給食っていうものを浸透させていく、やっぱりそれが袋井の子供達に必要なだっていうことが、私たちにも落ち、親にも落ちていくとなるほどって思うんです。例えば、私も偉そうなことは、自分がちゃんとやってないので言えないですが、昨日、けんちん汁いただいたんですけどね。例えば、家庭で

今けんちん汁を同じように作りなさいっていった時に、やっぱり野菜が高くなったりして出来ないですね。学校給食みたいなものを、家ではすごいお金が掛かるし、やっぱり時間もないです。じゃあ、もっとファーストフード的なもの、安価なものもいっぱいあるもんですからね。そういうところで、天秤にかけた時に、本当に学校給食が大切だとか、これが子供達にとって必要だっていうことを、受ける側が落として行かないと、なかなか進んでいかないんじゃないかなっていう風に思います。そういう面でも、もう少し行政側からのこういうことをしていますが、なかなか浸透して行きません、じゃなくて、そのなぜそこに浸透して行かないのか、なぜ受け入れられていかないかっていうところを、もうちょっと見ていくっていうか、そういう実態も知っていく方が良くないかなっていうふうに私は感じたんです。

●大場市長

溝口委員のおっしゃるところは、今の鈴木委員がおっしゃる内容と同じようなところですか。

●溝口委員

そうですね。要は、給食を食べる方の人達が、ちゃんといいもんだと。啓蒙活動もうちょっとしなきゃいけないっていうのも勿論あるんですが、そういうところも含めて、しっかり理解してないと。ただ、僕らも小学校の時とか、給食って普通に出てくるものだし、か思ってなかったんです。そこを、もうちょっと家庭にも、給食っていうのはこういうものとか、今、袋井市として給食を通して、こういう協力ができるんだっていうのを、もっともっとこれ以外にも打ち出していけたらなという思いはあります。それは何がいいかっていうのは、実際に食べる人たちの意見をちゃんと聞かないと分からないところですが。

●大場市長

吉田委員、いかがでしょうか。

●吉田委員

まず家庭っていう意味で言うと、給食に対してお母さん方が何か不満を抱いているってことは、今まで聞いたことがなくて。今まで充分袋井市さんがやってくださってるっていうのもあるんですけど、そこで理想を出されてるっていう安心材料なんですね。それをじゃあ家庭でもやっていこうっていうところまでは行けてなくて、安心安全なものを出してくれてるね、良かったね、で終わるんですね。それを、日本一の健康文化都市を目指してっていうところにまで、市民の意識はやっぱり行っていません。それで、日本一の給食を目指すというのは、とても耳障りのいい言葉なんですけど、じゃあ何が日本一なのっていうことと、日本一であるべきかどうかとも正直分からなくて。ちょっとここで何をどう言えればいいか、まだわからない状態なんですけど、子供達にとって何がいいのか、そこをもう少しフィーチャーしていけたらいいなと思います。

●大場市長

例えばですけども、私が最初、吉田委員さんのお話を伺った時に、子供目線、家庭目線の捉え方、見方判断も充分考慮して、そのアプローチでの給食への取り組みを考えていくべきじゃないかというお話だったものですから、場合によっては、例えば、生徒や保護者は今、吉田委員おっしゃられたように、別に日本一じゃなくてもいいよと、それよりも、例えば給食費が抑えられるように、もっとコストを抑えてよと、そっちの方が大事なんだよとか、例えば。例えば、そういう人たちもいないのと、そういう人たちがいた場合の視点も忘れないでねっていう、そういうメッセージも含んでいるのかなと思いましたけど。そのあたりってどうなんでしょうか。例えば、今回この日本一の学校給食と言うことで、本当に給食で頂点を目指そう、例えば、地産地消率を高めて、子供たちが地域の野菜に触れて、地域の恵みを充分享受してもらうこと、また、栄養の取り方によって、子どもの体や心の健康にも影響してくるんだということを、気付いてない人たくさんいるけれども、結果として、例えば成長して20年後、30年後、大人になったときに、自分はバランスのとれた食事、給食を食べてたから、今自分がバランスの良い生活ができているのも、昔のそういう味を知っていたからだと、要は昔を振り返って実感するとかね。例えば、それが時間が経ってから、かなり時間が経ってから、それが分かっていくとか。それぐらいを考えて、おいしい給食課はこの日本一を考えているんですけども、そんなことよりも、もっと安くしてよとか、そんなことまで考えている人がいないんだから、もうちょっとシンプルなものでいいんじゃないとか、例えば。そういう人たちの想いも、少しは考慮されたかっていう、そういうことかもしれないなと思ったんですけど、そういうことですか。

●溝口委員

多分、そういうことだと思います。ここですごくかっこいいですよ。日本一を目指すとか、老朽化だから、もっといい設備しなきゃいけないとか、これは素晴らしいと思う。多分やって間違いないことだと思います。ただ、一方で、お母さん方が、それを第一に望んでるかっていう、先ほど言われたように、給食費はただになれば嬉しいのになあっていうふうに思ってる人も当然いるでしょうし、給食は出て当たり前だと思ってる人もいるだろうし、だからそこを、どううまく結びつけていくかっていう。ここをきっちりやらないと、こっちはできましたと言ってるのに、子供とか親は何やってたのっていう話になりたくない。それでは面白くないなって言う、そういうことだと思います。

●溝口委員

目指す方向性はいいと思うんですが、最先端の機器を入れて生野菜も提供できるって、すごくいいんですけど、まずそれは市内全員がそうだよなって、同じレベルに改修してっていうところを目指すのはとてもいいと思うんですけど、それを家庭、市民全体へっていう橋渡しのところがやっぱり上手く行かないと、この取り組みは市が勝手にしがやってるだけで終わっちゃうのかなって思います。

●鈴木委員

何をもって日本一っていうか。給食って日本一って知ってたって、身近な人に聞いたら知らないって人がやっぱり多くて。地産地消なんだってという話をしたら、それは素晴らしいねっていうような、やっぱり市民の意識も、そこまで浸透してないというのもあるんですよね。実際に給食費が本当に払えないとか、給食でしか食を得てない子がどのぐらい市内にいるのか。やっぱりそういうのも、全然今分からない状態ですよ。安ければいいばかりではなくて、やっぱり安全で。でも今、市民っていうか、皆さんが多様化してるので、多少高くても安全な食を求めたいっていう人と、いや、それよりもとにかく食べればいいんだって、お腹を満たせばいいんだってという人もいて、そこが多様化してると思うんですよ。その中であって、給食日本一だから家庭でもぜひっていうのを一方的に進めてもなかなか浸透していかないんじゃないかなと思います。市民の意識とか実態、実際のところ、学校の中でどうなんだろうと、子どもたちも。私も自分が受け持った中で、給食がなかったら、この子生きていけないなあっていう、うちで食べてなくて、昼しか食ちゃんとしてないなあっていう子も実際にいたんですね。逆に、もう給食が苦痛で、給食はがあるから学校行きたくないって子もいたりしてね。色んな子がいるので、そういう子どもの実態から、もっとうち多面的なところから攻めていかないと、なかなかこれが浸透して行かないって思います。もうちょっとこういろんなところから考えていきたいなって、子供のためにも。ここに挙げられることもたしかだし、予算つけていただけるなら、市長さんにいっぱい予算つけていただいて進めていただきたいのは、どれもそうだと思うんですよ。でも、お金で解決できない部分もきっとあるんじゃないかなっていうところに目を向けたいなあっていうのはあります。

●大場市長

なるほどね。私も市長になって、この日本一の学校給食だったんだって、正直初めて知りました。なおかつ、もっと驚いたのが、袋井は日本の学校給食なんですと、給食で生野菜が出るんですよって言われた時に、給食で生野菜が出るっていうのが、そんなに特殊でレベルの高いことなんだっていうのを、正直初めて知りました。私、お恥ずかしい限りだったわけですがけれども、それぐらい、給食のある意味難しさというか、そういったものもそこにあるんだなと言うのも知りましたし、鈴木委員がおっしゃられたように、いろいろ多面的な要素がそこにあるんだっていうのを、少しずつ少しずつ、やっぱり立場的に理解してこれたんですけども、やっぱり最初の私がそうであったように、市民ってそこまで考えてないというか、知識もないし、情報も得られてないから、この給食に対する考えを、例えばお聞かせくださいって言った時も、その語る情報すら持ってない、先ほどお話ありましたけど、出てきて当たり前みたいなね。それで出されたものを食べて、それで終わりみたいな。それ以上でもなく、それ以下でもなくみたいな。あとは、親としては安ければ安い方がいいよねと、なんなら今は、全国的に給食費無料の動きが出てるんで、無料にならないのみたいなね。そんな本当に表面的な事しか、私たち触れてこなかったというか、そうだったなと言うのを反省してる。私個人が反省してるんですけど、それを考えると今のお話を伺いつつ、その通りだよなと、私は2年半、市長をさせて戴いて接して触れてきたからこそ、いろいろな知識や色んな必要性、食育の大切さとかですね。そういったものの中で、自分が日本一の給食を目指すことって意義のあることなんだと、やっと理解でき

るようになってきたし、その価値というの、場合によっては、人に語ることもできるぐらいまでにはなったけれども、そこまでには、本当に道のり長いよな、と言うことを感じてるんですよ。だからそこを、どういう風にしたらいいのかなと思って、今お話を伺ってました。要は、結論として、私がそうであったように、食育の大切さすら分からなかった自分が、大切さを語るまでになるぐらい、市民の人たちにそれを理解してもらうことが大事なのか、もしくはそれは難しいんで、やはり現実的なもっと表面的なところで給食を考えていったほうがいいよと、例えばコストを下げるとか、もっとシンプルに行ったほうがいいんじゃないのと、別に日本じゃなくてもいいんじゃないのみたいなことも、考えていくべきじゃないかと。両極端なんですけども、それをやっぱりもう今一度考えないと、ちょっと議論が噛み合わないよねっていう気がしました。

●溝口委員

先ほど、目線変えてっていうのがありましたけど、一つ、日本一ってはずごくいい表現で、ただ鈴木委員も言ったように、この日本一が具体的に何が日本一か、僕も説明できないんですよ。多分、市長がどっかに出られて、うちの給食日本一ですよというときに、何がって言われた時に、なんかそれを一つ作っていただけないかなと。地産の野菜を毎日出してる。これは、もう日本中見てもこんなところないとか、そこは日本一なんです、でもいいですし、いろいろあると思います。例えば、それをみんなで共有して袋井の市民、皆さんが、それを言えるようになるっていうぐらいの活動にできたらと、まず一個はそれなのかなというふうに思います。

●大場市長

はい。教育長どうですか。

●教育長

はい。ありがとうございます。課題が書いてあるとうりです。実は、最後の教職員の意識向上っていうのは、私が感じていて、これが課題だなと思っているんですね。学校給食って子供達に提供して、それが家庭に反映されるみたいなところ。その上の項目に、保護者・市民への普及って書いてあるけど、どういうルートで行くかっていうと、直接行政がこうやってお伝えすることがあるにしても、一番大きなツールはやっぱり子供達から家庭につながっていくってことが一番大きい、保護者に伝わるってことが一番大きいので、先生方の意識ってすごい大切になってきてると思っているんですよ。実は、残食率がもうてきめんです。てきめんというとおかしいですが、先生、担任の先生が一言子供達に今日もう一口食べてみたら、すごい美味しいよねって言ってくれと、ぐっと食べる量が増えるんですよ。ということは、やっぱり担任の先生の意識っていうのはものすごく大切だとういことで、先生方がやっぱりそうやってくれることによって、多分子供に広がって、ひいては、市民にも広がる。市民へ広がるのは、もっと手段が必要かと思いますが、そういうところがあるので。要は、そういうところをどうやってアプローチして行くかっていうのは、僕はすごい課題認識を持ってるんですね。何をもって、日本一かってなかなか難しいところがありますけれど、言うなれば、施設も日本一、地場産物も日本一、市民の意識

も日本一、教職員の意識も日本一だっというような形になっていくといいかなと思っていて、捉えどころによってアピールするのが違うかもしれませんが、基本的には課題となっているものについては、もっと高みを目指しましょうということでやって行くべきかなというふうに思っています。値段を下げるっていう方には、ちょっと反対派なんですけど、安かろう悪かろうになってるのはいかなものかって話と、それから、実は要保護世帯と、準要保護世帯については給食費はお金が出ているので、行政から経済的に困っているお宅については給食費はちゃんと補助をしていますから。一部やっぱり給食だけで栄養をとっているご家庭がないわけじゃないので、そこへのアプローチが必要だと思いますけれども、安かろう悪かろうというよりは、やっぱりこういう項目で、ちゃんと施設体制で、ハードだけじゃなくて、ソフトがやっぱり充実するっていうところを目指すべきかなと思っています。ですから、皆さんいろいろ意見を頂いていくと方向性が少し共有できるというのと、そういう感じです。

●おいしい給食課長

今、安い高いという話をいただきました。実は、この物価上昇のあおり、影響を受けてまして、今年度から学校給食費を幼稚園、小学校、中学校すべて上げさせていただきました。上げさせていただくにあたって、当然、教育委員会の決定によるということになりますので、教育委員にも、教育委員会においても説明させていただいて、その後、家庭等にも周知しました。その前段では、学校給食運営協議会というものがあまして、保護者代表、学校の先生たちも入ってるような委員会です。そこで提案したところ、意見とすると、家庭でもやはり野菜の値上がり、お肉の値上がりなど、影響を受けているんだと言うことで、やはり家庭の食事が非常に質素になりつつあると、だからこそ、学校給食だけは値上げをしてもいいから、栄養満点でおいしい給食を是非提供してくださいという意見を、お母さんから頂きました。実際に、全家庭に値上げの通知をしましたので、相当数の反対意見があるのかなと、なんで値上げするんだ、私だって生活が苦しんだと言う意見をもらう覚悟でいたんですが、実際は1件もなかったです。そういう意味では、学校給食に期待されているのかなと、というようなことで頑張らなければいけないと、改めて思ったところもあります。あと、教育長からもお話させていただきましたが、この参考資料の2枚目にアクションプランが載っておりますが、それを一つずつ展開していかなきゃいけないかなと思っています。先ほど鈴木委員から、例えば地産地消の話をしたら、それはいいことだよ、ってということで市民の反応があったんだと言う話をいただきました。振り返ってみますと、私たちが地産地消こんなに頑張ってるんだって部分を報告している場が、主に議会なんですね。それが議会に報告したイコール形的には市民向けに報告することになるんですが、現実それが市民のところまで届いているかというのと、やはりクエスチョンがあります。そういう意味では、今後、例えば地産地消もそう、アレルギーもそう、食品ロスもそうなんですが、袋井市の給食はこういう展開をしてるんだってことを、やはり市民の方、保護者の皆さんに、子供にも知っていただいたり、気づいていただくっていうようなことの取り組みが、私たちがやっていかなきゃ行けないかなと思っています。それが、そうなのと気づいて、そんなに毎日のように市内産の野菜を給食で使ってるんだと、アレルギー対

応も、こんだけの子供に対してアレルギー対応やってくれてるんだと、そういうことを気付いて、知っていただく取り組み、展開っていうのが必要なのかなと思っています。

●大場市長

ありがとうございます。

●溝口委員

先ほど、教育長に言っていただいた教職員ですね。ぜひお昼ご飯食べてる時にゆったりと子供たちと話がしながら食べれる環境をぜひ作っていただきたいなど。実態がどうもそうではないみたいですので、なんとかそこを目指したいですね。

●鈴木委員

教育長が言われた通りで、これ美味しいねっていう一言でやっぱり残食率が絶対変わるんだけど、なかなかそのとこにいかない。そうは言っても、昼休みに、給食の時間にお便りを返さなきゃいけないからと、宿題見てる人は割と少なくなってきたかなと思うけど、お便りを書かさなきゃいけないとか、偏食の子の指導しなきゃいけないって、やっぱりやるのがいっぱいなので、もうマンパワーがいっぱいいっぱい。ただ意識を持ってもらうってことも大事。食が大事だって。これが変わったのが、センターになる前、学校が自校給食の時は、そこで作ってる人が身近にいるもんですからね。そこを子供たちも見てるし、おばさんたちが作ってるよっていう一言で、全然残食って変わったんじゃないかなっていう風に思います。給食の時間に一緒に食べるとか。担任の先生は、それをやらなきゃいけないんだったら、誰かそこに子供達と一緒にご飯食べながら美味しいねこれ、とか、どうやって作るのかねっていう、そういう投げかけをしてくれる人がいることでも違うのかなっていう。何かしないと、今の中で、先生ちゃんと給食を子供達と一緒に食べて、そこを指導してくださいよっ言っても、しわ寄せがどこいくのかなっていうのも思うもんですからね。やっぱり、そこには助ける人が必要かなっていう感じです。割と先生方、給食嫌って先生もいるんですよ。中にも、給食苦手だったって言う人もいるんだけど、その人たちにも語らせるということも大事かなと思います。

●大場市長

いろいろリアルな話が出て、素晴らしいなあと思うんですけど、一つ確認なんですけど、食育が大切かどうか、食育って大切ですよと思うかどうか。あと、食育とやっぱりバランスの良い食生活をするかどうか、これってまた別物だと思うので、実際、バランスの良い食事をとることが必要かどうか。これってどう思われますか。どうしてかっていうと、例えば私、民間の教育会社にて、留学生を多く送り出してました。それで、例えばアメリカなんかだと給食、食べる子と食べない子、お金を払えば食べれるけど、出さなきゃ食べれないっていう学校が結構あるんですよ、実際。なおかつ、出された給食なんかものすごい質素で、シチューみたいなスープとパンだけとかね。もう本当にシンプルだし、各家庭の、給食じゃなくて、ホームステイで入った家の食事なんかどうかっていうと、本当に、朝はコーヒーだけとか、リンゴがあればいい方とか。夜だって、レンチンのパスタ

だけとか。それはもう毎日毎日食べてるわけですよ。朝コーヒー、昼はスープとパンだけとか、あればいい方ぐらい。夜はレンチンのパスタがあればいい方。後は、ハイカロリーの菓子みたいなドーナツみたいなものを食べて、カロリーだけは摂取していると。後はどうするかっていうと、ビタミン剤であとは取ればいいのかみたいな、マルチビタミンだけ飲んでって人たちも結構いるわけですよ。どうなってんのかなと思うんだけど、それがアメリカの社会でも、結構、それをよしとしている人たちがたくさんいて、そういう人達を見てると、日本のやっぱり食育であったり、バランスの良い食事って、ものすごく貴重というか、ある意味変わっているというか、見えると思うんですよ、アメリカなんかから比べれば、そういうのを見てるとね。果たして、本当にやっぱり日本の今の人たちって食育と、本当にバランスの良い食事をとることの必要性ってどう考えているのかなって個人的に考えることがあるんです。そのあたりで、みなさんご自身のお考えと、世の中ってどうか。

●吉田委員

理想は本当に一汁三菜。野菜たくさんっていうのはわかってるんです。やっぱりそれは日本で育って、そういった見えない食育で育ってきたので、そうだと思うんですけど、理想と現実とは乖離しているというか。もう時間ない、ちょっと一品少ない、でも食べれるよねと、そういう余裕の無さがあるかなと思います。必要性はわかってるけど、できてないっていう家庭は多いんじゃないかなと思います。

●鈴木委員

その通りで、このアクションプランで、例えば、健康にはこれがいいです、健康センターでもいつも言われるんですが、野菜を。分かりながら、でもやっぱり時間がかかるんですよ。そういう面で時間と天秤にかけた時、やっぱりファーストフードとかね。野菜食べる代わりに、サプリで済ませようかっていう、そういう考えの人はやっぱりかなりの数いるんじゃないかなって思います。いいことはわかっていながら、でも、時間と天秤にかけた時はこっちを取ろうかっていう、本当はこういう生活をしたいっていう。

●教育長

食育とバランスの良い栄養食事を否定する人はあんまりいないと思うんですけど、いますかね。偏食でも大丈夫みたいな。

●鈴木委員

でも、中にはいるんじゃないですか。

●大場市長

いるかも知れない。

●教育長

いるかもしれませんが、それはどこかでしわ寄せが来るでしょうね、きっと。それを否定されたら、給食なんかいいじゃないかみたいな話になっちゃいますけども、これは多分、子供達の成長とか大人になっていく過程で、これをよしとしてきたっていうことは、昔から食育とか、食事のバランスについて、科学的にずっとやってきて、健康状態を見たときにこれが良いんだっていうことで言われてきているので。それを否定するってなかなかないかなと。現実問題できない人ってたくさんいらっしゃると思いますけれども、それにできればこういう食事をとりましょうねっていうところは、掲げてやっていくべきかなと思います。特に、学校給食はその通りだと思います。

●大場市長

どうして、私が今、それを確認させていただいたかと言うと、やっぱり情報発信をして行く側として、今の状況、現状を認識すること、保護者ってどう考えているのか、子供たちはどう考えているのかっていうのを知った上で、私はこの日本一の学校給食っていいと思っていて、ある意味必要だと思っています。先ほど、溝口委員の方からもお話ありましたが、もしいいんだったらもっと発信したらどうと。日本一の学校給食って何って、要は語れるぐらい情報発信をして、理解をしてもらう努力をしたらどうでしょうかっていうお話もありましたが、やっぱり我々それを目指す以上、それをしっかりとやることもある意味、最後の砦だとするならば、これをしっかりともう徹底的にPRしていく。ある意味、袋井市に行くとなら日本の学校給食だっということ、何なら引っ越してくる人がいるかも知れないと思うんですね。たとえば、それぐらいまでやると価値があるかもしれない。

●吉田委員

PRのことで思いついたことがあるんですけど、どうしても市民で学校給食っていう接点があるのは、子供の時だけですよね。後は、子育て世代という事になっちゃうと思うんですけど、例えば学級閉鎖がわかっている日、納入すべき物品が余ってる、どうしようっていう時に、市民、困窮世帯とかに配布なり、安く提供するみたいな、そういった別の形で市民を支えているよ、ってというような取り組みをしていけば、もう少し給食と市民とが繋がって、袋井市はいいことやってくれてるなっていう意識向上になるんじゃないかと思いました。

●大場市長

接点が無いですもんね。教育監、何かありますか。

●教育監

給食はすごく変わりましたよね、本当に。歴史的に、ララ物資等の栄養補給から始まって、社会構造の変化から、家庭の食生活も変わってきて。弁当か給食かという話題もあったりして、自分たちは弁当だった時代もあり、中学校は給食になるのがなかなか時間かかりました。その後、幼稚園を給食にするか、しないかの時もすごく議論があって、そこは家庭でやるべきではないかって言いながら、でも最後は幼稚園も給食になりましたけど。

これからの給食に何を求めていくか、どのように子供を育てていくかなど、先を見て行かないと、教職員にも、これからこういうことが子供たちに必要なので給食を大事にしているように伝えないと、今指導できていないからやるということだと、うまくいかないと思っています。先を見て、袋井市がめざしている健康文化都市宣言に給食ものせていけば、すごい起爆剤になるかなと思います。行政にしながら、外から目線で言っちゃいけないかもしれないですけど、そんな思いを自分は持っています。

●大場市長

親からしたらやっぱり、特に、今お弁当を作るか、給食かという選択しかないとしたら、楽をさせてもらえる給食っていう、そのための給食なのかもしれません。

●鈴木委員

私、給食は保護者にとっては、とてもありがたいと思うし、値段いくらあげても、値段で家庭では作れないので、絶対ありがたいと思っていることは確かですね。

●大場市長

確かですね。自分たちの負担が減ることの存在価値っていうのは、もう圧倒的に多分大きいんですよ。

●吉田委員

一食考えなくていい、作らなくてもいいって、本当に助かるんです。

●大場市長

ですよ。

●教育長

だから、子供がいるお宅は、当然ありがたみを痛感してますよね。きっとね。

●大場市長

逆に、楽をさせてもらえる、負担が減るものであれば、別に日本一じゃなくてもいいよみたいな結論になる可能性も非常に高い、そういうことでしょうか。

●鈴木委員

何を日本一。そういうふうに、みんながありがたく思ったら、それが日本一じゃないかと。

●大場市長

だから、そこはやっぱり結び付けてあげないと。

●鈴木委員

難しいなあと思って。

●大場市長

やっぱり負担が減る、なおかつ栄養も、地域との繋がりも日本一だよと。しかも、手作りでそれが実現されていると。こんなとこないよと。生野菜だって食べれるよと言うことをしっかりPRすれば、そんなに進んでいるんだということの評価してもらえるんですかね。

●鈴木委員

食べてもらうことも大事じゃないと思うんですよね。子供だけじゃなくて、こんな給食を食べてるんだっていう、やっぱり試食って。さっき言った、給食の時間、先生方が忙しいので、マンパワーで、たまには地域のお年寄りとかが入って一緒に食べて、そういうの作るのかっていうので、これなら私にもできそうだっていう、親の上の世代を動かすとかが必要なのかも。やっぱり食べてみてもらうのが一番いいのかなと思います。

●教育部長

私も教育部長になって、初めて給食を食べました。我々の場合、小学校時代はお弁当でしたが、給食を食べさせていただいて、先ほど言ったとおり、確かに味は薄いですが、野菜があって、人間ドッグで食べる健康食みたいな部分がありましたが、これを食べてるのは理想だなんていう部分は感じました。先ほどの教育長の話じゃないですが、子供のうちにやはり一番ベストな状態のところを学んでおくことが大事だと思います。どうしても将来的にサプリになったりとか、菓子パンになったりとか、カップラーメンになっていく若者は出てくると思うんですが、底辺が狭ければ、成長した時にもっと狭くなってしまうから、なるべくは小学校、中学校のときに家庭も含めて、理想かもしれないませんが、広いところで、というのが学校給食に必要なのかなと思って、今日の会議に臨んでいます。

●教育長

伝わってないんですよね。試食している人たちが、ごく一部に限られているかもしれない。それでも、かなりの人が給食センター来てやってくれてますし、この間、私がたまたま給食センターに行ったら、山名幼稚園の保護者が給食を食べに来ていたんです。就学前のこれから小学校に上がる子供を持っているお母さん方が、みんなで食べに来てました。美味しいですかって聞いたら、美味しいですって言ってくれたものですから、そこで日本一を目指してますよって話をさせてもらったんです。やっぱり、そうやって食べてもらったりする場合はわかるし、私たちのPRがどこまで届いているかなっていうところはあります。先ほど、鈴木委員がおっしゃったように、何をもって日本一かって言うと、市長がおっしゃったとおり、安定して毎日9千何百食という数を提供していますから、お父さん、お母さんの負担は軽減してますけれども、たとえば、徹底して衛生管理もしていますから、こんなに衛生管理してる給食はないとか、地産地消であったり、アレルギーの子だって、ちゃんと食べるようにしてますよ、とかっていうのがあって、何でもあっても、かなりやってるので、やっぱりもっと伝えていかなきゃいけないかなって思うんですね。その

伝える人を、どんどん仲間を増やして行って、ステークホルダーをたくさん作っていくってことが、行政だけじゃなくて、鈴木委員がおっしゃったように、どなたかが給食の時に来てくれて、地域の人がやってくれたりするのはすごいいいかなと思いました。

●溝口委員

定期的に、月に一回でも、小学校でも幼稚園でも、一部屋あげて、そこに給食を準備して、地域の方に食べに来てもらえるようなイベントもあると、広がりやすいかもしれないですね。そこでアピールもできます。

●大場市長

給食のエバンジェリストを作らなければいけないですね。

●教育長

確かにそうですね。

●大場市長

インフルエンサー的な。

●教育長

学校運営協議会の時に、ある委員からPRが足りないって言われてまして、インスタとかにあげなきゃダメだって、みんなインスタ見ているんだから、インスタにあげなければダメだっていうことで、市のインスタに学校給食を何回も取り上げてもらっているんですけども、それでもまだまだですかね。

●吉田委員

インスタって、興味ある人しか見ないかも知れないですね。

●溝口委員

そういう意味では、少し言ったんですが、中学生未来会議でも、そういう話があったんで、例えば中学生にもお願いして、毎日給食を上げてもらおう。彼女ら、彼らのイメージでっていう手はあるかもしれないですね。広く一般にっていうことで。

●大場市長

本当にいろんな意見が出て、大変参考になりました。他に何か。

●鈴木委員

地産地消がいいこと分かってるんだけど、なかなか安定供給が難しいというような話がありました。自分の住んでる所は、昔は田んぼと畑ばっかなのに全然なくなっちゃったっていうこともあって、将来的に見て、袋井市として可能なのかどうか、その見通しはどう

なんですか。人参はなかなか難しいという話を聞いて、お米は良いつて言うことなんですが、将来を考えたとき、やっていけるのかどうかっていうのはどうですか。

●おいしい給食課長

それこそ今も、農家の方のご協力頂いて、先ほどが言っているように、毎日の給食の中で、野菜一品でも袋井市産をとということで実績を積んでいます。のそれは提供する側があって初めて成り立つことです。やはり、給食を提供してくれている農家さんは、実際、高齢化が進んでいます。高齢化が進んでいる農家さんの家庭を見ると、後継者がいらっしゃるかという、いらっしゃらない家庭の農家さんが多いです。そういう意味では、今野菜の1/3が袋井市産出でということで目標にあげてまして、去年は44%ですので、クリアしてるんですが、じゃあ5年10先も大丈夫かって言われると、非常に厳しいです。ですので、私たちが農家さんからの情報を得て、また農協さんからの情報を得て、あそこに通年できゅうりを作る農家さんが誕生したよつて言つと、そこにアプローチして、色々お願いをしたりということで、契約に結びつけているというところがありますが、簡単ではないですね、地産地消を進めるには。ですので、これからもつともつと農政課とも連携を深めて、農協さんからの情報を仕入れるつていうことも必要でしょうし、袋井市は、東西は6kmないようなところで、お隣には磐田市がありますし、お隣には掛川市があります。そういう地理的などところで考えた場合に、地産地消という部分、県の考え方は、県内産が地産地消です。袋井は袋井市産をなるべく使つていこうつていう独自のルールを定めまして、袋井市内産にこだわっているんですが、例えば、遠州中央農協管内の農作物であれば、三川の隣の磐田原では、根深葱も遠州中央農協産として紹介していますので、そういうものも近場の地場産物ということで、範囲をもう少し広く、考え方を柔軟にしてもいいのかなということ、地産地消をキープする。地産地消の考え方を、ちょっと柔軟な考え方を持つてもいいのかなと思うところもありますので、検討していかなきゃいけないと思います。近くで本当に安心ですので、県外産を使うよりも安心ですし、流通コスト等も考えればSDGsにも繋がると思つていますので検討したいなと思つています。

●教育部長

最初に説明した、野菜の加工施設として、浅羽センターがそうなればつていう方向性を考えていますが、泥付き野菜が入つてくると、それを洗つための部屋が必要ですか、その時間が必要だということ、今は中部はその機能があつて、泥付き野菜でもやれているんですが、浅羽・袋井はそういう機能がないものですから、そういうことをすることによつて、農家の方々も一個一個大量のものを、全て洗いながら取めたりとかつていう手間もなく、取つたものそのまま給食センターへ、そこから給食センター側での作業が始まるということ、先ほど高齢化の問題もありましたが、そうしたところで、もらう側の給食センターも少し努力と言いましようか、機能を高めることで、地産地消の促進に寄与できるかなと、そんな絵も描いております。

●大場市長

広域化の中での地産地消ってやっぱり考えていけないといけないんでしょうね。きつとね。実は、全然話違うんですけど、道の駅の設置要望なんかもあって、道の駅を袋井でできるのかっていう議論の時、道の駅ってやっぱり地場産品を販売するっていうことから、どんな野菜が出荷、集荷できるのかっていうことで検討された事業者がいて、非常にこの地域って種類が少ないんですって。だから、ひとつの道の駅を作るにしても、この地域の要は野菜の生産種類の低さってというのが若干ネックになるということでした。それぐらい、この地域を見た時にも若干少ないエリアということなんで、やっぱり今後のことを考えると、より広域での、もちろん県内でということではあるんでしょうけど、少しエリアを広げないと、維持が難しいかもしれないですね。

●教育長

少しエリアは考えてもいいかなと、つまり何が大切だといったら、新鮮でより良い物をもっていうことでしょう、地場産物というものは。だから、その基準というか、それさえ守られればいいかなって感じなので、先ほど言ったように、今、浅羽センターのところでの構想を練っている下処理・加工センターみたいな話は、おそらく冷凍施設をある程度用意しないと、下処理したものを持って行った時に、冷凍してちゃんと保管しなきゃいけないので、ある意味、季節の外れっていうか、旬じゃないものについても冷凍して保管するような事も可能かもしれません。何を言わんとしているかという、おいしい給食かは一生懸命農家を探索して、個人的な努力で必死になって確保してくれているんだけど、もっと対組織でやらないと限界が来てしまうかなと思っています。その一つとして、さっき言ったように、地産地消コーディネーターみたいな人がいてくれた方がいいかなと思うのと、これから農家も高齢化してるので、一番は多分農協だと思んですけど、農協さんと対組織で学校給食を一緒にやって行きましょうみたいな形になって行かないと、教育委員会だけでやっていては限界があるし、農政課さんも協力してくれるにしても、相手側、供給側の組織で対応するみたいな仕組みを作らないと、限界が来てしまうかなと思いました。

●大場市長

溝口委員、どうですか。最初、口火を切っていただきましたけど。

●溝口委員

だいぶ分かってきました。家庭の事情も、わかってきました。そういう意味では、よかったなと思いますね。ただ難しいのは、食育と言って子供たちを通して、食事のことを家庭に伝えるのは結構難しいかなと、家庭で料理を作る方が、それを参考にしてなんかやってみるかって言われると、なかなかそれはない。それよりも、ネット見てとかの方が主流かなと。そこら辺をもっとうまいアプローチというか、アピールの仕方があるのかなと思いました。その辺は、まだ手をつけるところがあるかなと。

●大場市長

はい、ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。全然別の切り口でも結構ですけど。今日の議論の4つテーマとして挙げられていますけど、施設の老朽化と衛生基準管理、地場産物の安定的な確保、健康づくりにつながる保護者・市民への普及、教職員の意識向上。

●教育長

地場産物とちょっと重なるんですけども、有機野菜の話なんですけど、給食で有機野菜を提供しているっていうところもあって、有機野菜の認証を受けている野菜を使っているところもあるし、袋井市のように認証を取ってないけども、農薬をすごい減らしているところがあって、それも一つの売りになっていくんだらうなと思うけども、安定的な供給がなかなか難しいとか、価格面で相当高くなってしまおうという課題があって、でも取り組んでいく一つの要素になり得るかなって、私個人としては思っているんです。これについて、なんかご意見があれば。

●鈴木委員

さっき言った、多様化してるってところで、やっぱり、有機野菜を食卓に、高くても、今色々野菜が高騰しているけどそれを持っていう思考を持ってる人たちもいるし、そういう農家さんが増えてるなって。自分を取ってるものですからね。いくつかあるんだけど、ただたくさん作ってないんですよ。だから、それを学校給食にっていうところがなかなか難しいのかなって。規格も揃って無いし、本当に。何か一品とか、そういうのも入れて、そういう農家さんと、契約ができれば一番いいのかなと。大きくやってないですね。

●教育長

そうですね。ロットが揃わないですね、なかなか。

●鈴木委員

でも、お店でそういうの売ってるところは、いっぱいあります。レストランで有機を売りにしているってところ。だから、それができれば日本一かなと。

●大場市長

やっぱり、小ロットなんですね。やっぱり大規模生産者は、大規模流通に乗せなければ行けないもんですから。やっぱり、見栄えとか、少しでも傷があると流通できないものだから、見栄えのために、さまざまな農薬なんかも含めて使うと。だから、それは使わなくてもいいようにするためには、日本の社会自体が若干傷があってもいいじゃないか、曲がってもいいんじゃないかと、そういうことがもっと普及して行かないと、実現できないと思うんです。今、日本政府として、みどりの食料システムという新しい取り組みをして、減農薬・無農薬を広げていくっていうことで、市も協力するようというリクエストがあったんですけど、でもそれをもし進めるのであれば、そういった一番の消費者の側が、曲がってもいいんじゃないか、少し傷があってもいいじゃないかっていう状況にしな

いと、売れないから作らない。特に、大規模生産者がそういう状況なんで、出口を改善して意識を変えるところからやっていかないとトータルとして改善しないんで、国としてはまずそこをやってよっていうのを、逆に言いましたけど、やっぱりそれって非常に大事だと思うんですよね。うちの妻が、海外で暮らしてた時に、フランスでしたけど、例えばジャガイモとか、インゲンとか、箱でドンと置いてあって、袋に取り分けて、それを計ってシールを貼って、レジへ持ってくるんですけど、妻がインゲンを選んで、いいものを袋に入れていたんですが、そしたら見回りの人が来て、そんなことやっちゃダメじゃないかって袋を戻させて、こうやってやるんだって、ガバツとつかんで袋に入れさせて、こうやってやらなきゃダメよって怒られて、そうしたんですけど、やっぱり、妻は日本人ですから、綺麗で見栄えがいいものを選ぶんですよね。日本のスーパーでも、パックになってるのも、どれがいいかなって選ぶじゃないですか。だから、もうやっぱり消費者教育からして行かないと駄目なんだろうね。だから、少しぐらい傷だろうと何だろうと、それが普通と思って買える環境。これをしてかないと、やっぱトータルとしては進まないと思うんですよね。だから、そこからやっぱ変えていく必要があるんじゃないかなと思うんですよね。だから、ちょっと先の長い話ですし、生産者側からすると、例えば自分の畑を無農薬でやりましたが、隣の畑で農薬が使われると舞って来て、農薬がついちゃうと言うことで、生産者側の課題もやっぱりあります。やっぱり無農薬でやりたい人たちがいたら、ずっとみんなやらないとそれが実現しないと。だから、どうしても離れたところの小規模で、ここは無農薬でやるというような形で取り組んでいかないと出荷できないと、言うようなことが、本当にいろんな意味での課題が、やっぱりあるなと思います。その辺りもトータルで解決をしながら、無農薬だったり、減農薬だったり、なおかつ地産地消に結び付けられると一番いいですけどね。そしした社会を作っていくかきやいけないですよ。そういうのも教育の一つですよ。

●鈴木委員

長い目で見たらね。不揃いの野菜も価値があるっていうところが、すごい大きな教育ですよ。

●教育長

給食は子供たちが選ぶわけじゃなくて、出てきたものを食べるわけですけど、ある意味、給食センター、納品するところがお構いなしだった可能性はあると思うんですよね。ただ、やっぱり給食センターの納品だけで、ビジネスが成り立つとなかなか難しいので、やっぱり課題がありますけども、なんか取り組んだり。確かに教育の話になっていくかなと思います。

●教育長

現場で直接農家の方と収穫体験みたいなのも徐々に復活したんですよ。コロナがあけて。

●おいしい給食課長

収穫体験も、収めてくれる農家さんがいらっしゃるからこそ、やらせてくれるんですね。そういう農家さんとの付き合いってというのが非常に重要だと思っています。今のオーガニックっていうところでは、鈴木委員がおっしゃったように、やはり問題は安定した量の確保とか、不揃いが多いよとか、後は価格の問題です。2年前くらいでしょうか、JAS認証は取れていないんだけど、それに準じた形で有機米を作っている農家さんと話をしたんですが、通常より3倍の値段でした。そうすると、それを保護者の皆さんに理解していただいて、給食費に反映させる時のがきついとすると、その差額の分を、どこかが補填しなきゃいけないっていうことも課題になろうかと思います。

●溝口委員

少し話ずれるけど、以前に袋井で藻かなんかが入った食事を出されましたよね。どういう今状態になっているのか、なんか問題があったのか、テスト的にやったのか。

●大場市長

あれは、テストだけでしょ。

●おいしい給食課長

袋井出身の方が起業してまして、今、石巻の方で海水を使って、藻の生産をやっています。その方からのご提案で、一回藻を使っての給食提供どうだろうかとか、これからやはりいろんな部分で、タンパク質等の摂取が厳しく、要するに食糧の問題ですね。厳しい中で藻というものも、非常にこれから脚光を浴びるはずだからというところでご提案がありまして、ではやりましょうということで、藻だけの提供ではなくて、その日をグリーン給食と銘打って、袋井のチンゲンサイをふんだんに入れた味噌汁を提供したり、全体的に緑を強調した給食を提供しました。藻はイワシの黒はんぺんの衣として揚げまして提供しました。新聞社、テレビもかなり来てくれて反響が大きかったので、学期に一回は、何かに添加するような形で、子どもたちに提供して、取り組みを進めて行きたいなと思っています。

●大場市長

吉田委員、何か他にありますか。

●吉田委員

給食とちょっとずれてしまうかもしれないですけど、外国籍のご家庭で朝食を出す習慣がない方がいらっしゃるみたいで、子供がお腹すいた状態で登校しなきゃいけない、空腹で情緒不安定になってなかなか困ってるということですが、親御さんになかなか理解がえられないっていう話を聞いたので、食育っていう意味では、外国籍の方にもアプローチしたほうがいいんじゃないのかなと思いました。

●大場市長

それはどういった意味でのアプローチですか。

●吉田委員

朝食を食べていないと元気が出ない、お昼まで持たないよって、ブラジルだと学校で朝食を食べる地域があるので、親御さんたちはそれで育っているの、わざわざ家で用意するの、なんて言ってるらしいんですけど、直接聞いた話では無いんですけど。子供も食べずに送り出しちゃう、とうい話を聞いて、現場の教員が困ってる話を聞きました。

●大場市長

どうですかね、現場では。

●鈴木委員

ブラジルの子には、食生活を教えるしかないの、教えました。お菓子じゃダメっていうこととか。朝ご飯を食べていない子っていたんだけど、自分で何とかするっていうのを身につけさせるよう、教えました。ご飯と、みそ汁なら味噌を溶けばいいんだよとか、目玉焼きぐらいならできるよねっていうような。親御さんがいて作らないうちはともかく、親御さんがいないうち。夜勤でいないとか、子供だけで朝起きてくるっていう子も中にはいるので、そこも学校がそこまでやる。働き方改革とか、そこは家庭教育だっていう部分かもしれないんだけど、皆さん努力してる部分もあるんじゃないかなって思います。だから、ブラジル人のご家庭の生活習慣がそうだったら、やっぱりコミュニティに対して、何とご飯食べさせてこないと力が出ないよっていうようなことを、繰り返し話をしていくっていうのが大事かなって思っています。あとは、物理的に食べれないと子は何とかしてやるっていうのは、社会全体でして行くべきかなって思います。

●大場市長

いろんなパターン外国人のお子さんがいると思いますけど、たとえば、日本の学校は朝ご飯出ないんで、ちゃんと食べさせてね、で解決する家庭もあれば、今鈴木委員がおっしゃっていただいたような、なかなか奥が深い家庭もあるでしょうから、ケースバイケースなんでしょうけど、まずはアナウンスをする、それで解決できる子はそれをして行くと言うことが必要かもしれないですね。学校教育課長、どうですか。

●大場市長

外国人のお子さんの入学、編入については、すごい時間をかけて面談をやります。まずは日本の学校の文化、活動ってこういうものなんだよってことをすごく丁寧に説明して、給食についてもちゃんとやっています。多くのご家庭は、給食ちゃんとあるんだね、朝ごはん食べて来なきゃいけないんだねっていう形で、ちゃんとそこに合わせてやっていただけるんですね。日本の教育を受けるっていう前提で入って来るので、そこはちょっとお願いしたいということで、子供が困ることがないようにしましょうということ。中には、先ほどからお話があるように、保護者が、文化とかじゃなくて食べさせてない家庭もやっぱりあります。そういったところについては、これは外国人、日本人も関係ないんで、ちゃんと朝食食べさせないと、昼までもたない子供がかわいだからってということで、

家には帰ります。それと、給食とちょっと違うんですが、例えばお弁当持ちの時、結構私も経験があるのは、お弁当の時に外国人の子供たちがすごく窮屈な表情を浮かべる時があるんです。文化が違うので、日本の子供たちのお弁当で凝っているじゃないですか。外国人の子供たちのお弁当は、そこまで凝らないんですね。それを子供たちがすごく恥ずかしがってということが、何度かありました。色々聞いてみると、子供ながらに恥ずかしいなって思うことがあるようで、そういったことも保護者に状況も伝えます。やっぱり子供達にとって、食べるってすごく結構重要な時間なんですよ。そういったところの配慮もすごく必要だなって思うことがあります。

●大場市長

現場でも努力もしていただいているようなので、もしあの対応可能なところがあれば、引き続き改善できるのであれば、お願いします。他に何かありますか、いいですか。まだ、若干時間ありますけど、今日は本当に想定していた以上に、いろいろ深い話ができよかったなと思っております。いろんな視点で給食と言うものを考えられる機会になったんじゃないかなと思ひまして、やはり委員の皆様にごうした課題、教育現場の状況等の情報交換させていただく機会を持てたっていうのは素晴らしいことですし、それでこそ、まさに教育委員会の存在価値と思って改めて感謝をした次第であります。私も教育委員会そのものには、常に参加できないわけですけど、こうして総合教育会議ということで、皆さんと情報交換ができることによって、教育委員さんとして常にご議論していただいているんだなというのを感じさせて頂くことで、より安心をして、袋井への教育をお任せするに、本当に安心していただけるなと思った次第であります。今日、この給食に関しましては、日本一の学校給食と言うことで、これを今後、どんな形で市民に理解をしていただいで、子供たちへの食育による成果を引き出していること、また、日々の給食でありますので、子供たちの体づくり、心づくりにしっかりと反映させていくためにはどうしたらいいかということ、改めて現場の皆さんが確認できたことだろうと思います。この日本一をうたうことがどうか、という話も出ましたけれども、せつかくそれを今、現場の人たちは必死に実現をめざして、自負してやっていますので、より一層取り組みを深めていくことで、PRにしても、実際の成果にしても、いい形で市民にフィードバックできるような形で取り組んでいくことが必要なのかなと改めて思ったところでもあります。現場も大変なところを、日々乗り越えながら取り組んでいる内容でありますので、教育委員の皆さま方にも是非バックアップと言いますか、ご支援いただければと思っております。また、何か給食に関してもご意見があれば、お聞かせいただければと思ひます。実は、吉田委員の前任の瀬川委員が、委員として私のところに最後言っていたのが、給食の食器に関してです。食器が給食センターによって違うんです。樹脂製の仕切りの入った食器だと味が混ざってしまっておいしくないから何とかしてやってくれと、それが瀬川委員の私に対する最後のご意見でございまして、それをしっかり現場には伝えましたけれども、いろいろな課題が現時点でも残っているところでもあります。そんなことで、」教育議員の皆さんには、引き続きご負担をおかけしますが、ご協力いただいで、いい食育と、そしてまた、子供たちが健やかに育つように、給食をいい形で実現して行きたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。今日はありがとうございました。

4 閉 会

●石黒教育部長

教育委員の皆様、市長ありがとうございました。今日いただいた意見として、まず最初に、提供者側の思いとしてお伝えしましたが、食べる側、また保護者側の思いを具現化して行く必要性という切り口から入りまして。さまざまな日本一の給食の基準ですとか、そういったものも含めまして、給食のPRがまだまだ足りないよと言うようなお話もございました。今日いただいた意見をもとに、アクションプランの9項目を一つずつ実行することによって、冒頭説明がありました施設の改修に向けても、さまざまなご意見をいただきながら、前に進んで参りたいと思います。教育委員の方々、また市長、それから市の幹部につきましても、まず食べていただく機会をいくつか作って、そのたびに、いろいろなご意見をいただきながら進んでいきたいと思いますので、引き続き、学校給食に関心を持って見守っていただきたいと思います。本日はありがとうございました。

(午後2時50分閉会)